

《翻 訳》

「独逸協会学校」教師としてのゲオルク・
ミヒャエリス(1)

——『国家と国民のために』より——

堅 田 剛 (訳)

翻訳にあたって

この翻訳は、ゲオルク・ミヒャエリス『国家と国民のために——ある生涯——』(Georg Michelis, Für Staat und Volk, Eine Lebensgeschichte, Berlin, Furche-Verlag, 1922)の抄訳である。

ミヒャエリスは、第一次世界大戦末期のドイツ帝国宰相であるが、1885(明治18)年から89(明治22)年まで、独逸学協会学校(ミヒャエリスは'Doitsu Kiokai Gakko'と表記した)の教師として日本に滞在した。

原書は、本文のみで429頁に及び、幼年時代から公職引退後の生活までを記す回顧録となっている。目次は以下のとおりである。

- 第1章 幼年時代
- 第2章 ミヒャエリス一族
- 第3章 母方の一族
- 第4章 勉学時代 1863～1876年
- 第5章 学生時代 1876～1879年
- 第6章 最初の官吏時代 1879～1885年
- 第7章 日本の大学教師として 1885～1889年
- 第8章 わが故郷
- 第9章 ラインラント 1892～1895年
- 第10章 ヴェストファーレン 1895～1900年
- 第11章 シュレージェン 1900～1909年

第12章 財務省 1909～1917年

第13章 戦時中の食料委員 1915～1917年

第14章 帝国宰相時代 1917年

第15章 皇帝

第16章 ボンメルン 1918～1919年

第17章 ザーロウ・イン・デア・マルク

このうち、第6章末尾の来日にいたる経緯を記した個所（原書52～53頁）と、第7章のうち往路と帰路の旅行を除いた部分（原書91～135頁）を訳出した。「独逸協会学校」教師としてのゲオルク・ミヒャエリス、と題したゆえんである。

原書の目次には上記の各章ごとに細目次が添えられているが、頁数の表記が必ずしも正確ではないうえに、本文中に小見出しとして掲げられているわけでもない。また、奇数頁のヘッダーにみられる表記とも厳密には対応していない。しかも、それが肝心の内容を適切に表現しているわけでもない。

そこでこの翻訳では、細目次を尊重しつつも適宜独自の小見出しを設け、そのつど丸括弧の中に原書の該当頁を掲げることとした。抄訳であるので、全訳の場合以上に原書の参照を容易にしたつもりである。読みやすさを考えて、多すぎない程度に新たな段落も設けた。

また原書の人名索引にはごく簡単な略歴が記されているので、ドイツ人についてはこれを原綴とともに利用して、各節のあとに「*」記号をもって注記した。日本人については煩雑になるので略歴は省略したが、姓に加えて名を〔 〕中に補った。いずれも完全なものではない。

2回にわたって連載する予定であるが、訳注は各回の末尾に通し番号を付してまとめた。

訳出にあたって用いた原書は、駒沢大学と京都大学の各図書館に所蔵のものである。

両書はまったく同一のものであるが、京都大学所蔵の原書はミヒャエリス自身が寄贈したもので、「京都帝国大学へ、感謝の記念として、1922年5月11日、著者」という自筆の書き込みがみられる。出版直後にミヒャエリスは再来日し

たのだが、京都帝国大学に赴いた際に贈呈したことがうかがえる。偶然の発見であったが、図らずもミヒャエリスの自筆に触れることができた。

翻訳に際しては、とくに Bert Becker(hrsg.), Georg Michaelis, Ein preußischer Jurist in Japan der Meiji-Zeit, Briefe, Tagebuchnotizen, Dokumente 1885-1889, München, Iudicium Verlag, 2001、および同書の一部訳である、ベルト・ベッカー編『ゲオルク・ミヒャエリス——ドイツ帝国宰相と獨逸学協会学校——』酒井府他訳、獨協大学外国語学部ドイツ語学科、2003年（非売品）に加えて、中井晶夫『ドイツ人とスイス人の戦争と平和——ミヒャエリスとニッポルト——』南窓社、1995年、を必要に応じて参照した。（それぞれ「Becker」「ベッカー」「中井」と略記して、訳注に取り込んだ。）

原文には日本滞在中の日記や書簡が織り込まれているが、それが明示されている部分については文体を変えて翻訳した。

訳文は、原文の趣を壊さない範囲で、できるだけ自然な日本語表現を心がけたが、訳者の能力不足のせいで思わぬ誤りもあるかもしれない。ご叱正とご教示をいただければ幸いである。

「独逸協会学校」への派遣（原書第6章、52頁）

この宿命からできるだけ長く逃れるためには、当面は無給の補助職員として、ベルリン第二地方裁判所の検事局で働かねばならなかった。ここそが、私の官吏生活において決定的な転機が生じた場所であった。それは刑事部の会議においてであったが、私たちはある刑事事例についてとくに興味も抱かないままに議論していた。手続は淡々と取りまとめられ、無味乾燥ではあるが適正に進行した。判事席の私の隣には、若い地方裁判所判事が座った。彼は私より少しだけ年長であった。のちに帝国司法省の事務次官になったリスコ*である。審理の最中に、リスコは小声で話しかけてきた。何年か日本に法律教師として行く気のある試補を知らないか、と。私はよく考えもせずに、人差し指で自分の胸を指さして言った。「それなら僕が」。リスコは小声で答えた。「そのことはもちろん自分も考えていたところだ」。リスコの父親はベルリンの新教会の牧

師であって、キリスト教に興味を抱き、たいいていは彼から洗礼を受けた、ベルリン在住の日本人たちに信頼されていた。彼らのなかにベルリン駐在日本公使の青木〔周蔵〕がいた。彼はのちに祖国で外務大臣として傑出した役割を果たした。リスコは私のことを青木公使にお誂え向きの候補者と呼び、こうして私は彼とつながりをもった。簡単な面接のあとで、私たちは次のように合意した。私は3年間東京に行って、「独逸協会学校」(Doitsu Kiokai Gakko)というドイツ法学校の講師として働くことになったのである。私は十分な旅費と毎年1万5千マルクの給料を受け取るようになったが、これは日本の現状からして破格の高給と思われた。

*Lisko, ベルリン地方裁判所判事。のち帝国司法省事務次官。

両法博士(原書52～53頁)

青木公使は、私が彼の祖国に法学博士(Dr.jur.)として登場することに、大きな価値を見出していた。私は彼に、博士試験を早めることはできるでしょう、でもお金があると思います、と言った。彼はこの目的のために博士料として軍資金を増やしてくれたので、私は博士試験を受けるべく、ただちにゲッティンゲンに向かった。私がゲッティンゲンを選んだのは、そこではフォン・イエーリング教授*が法学部長であり、試験委員長であったからだ。そのうえ、彼が私の特殊な事情について格別に了解してくれることを、前もって確認できたからである。イエーリングには弱みがあった。自分の著作が、できれば様々な言語に翻訳されることを望んでいたのである。しかも日本語訳を手に入れることが、彼にとっての格別の執心事であるようにみえた。したがって彼は私の派遣を、渡りをつけるうえでの有望な可能性として歓迎し、大いなる親切心をもって受け入れてくれた。試験は5名の試験官と一人の若い教員によりおこなわれたが、全体として好意的な質疑に終始した。ただ一人、枢密顧問官フォン・パウルだけが、事態を厳しく、つまり私にとって都合の悪いように捉えた。彼は履歴書を読んで、私がブレスラウで彼の国際私法を聴講していたこ

とを見つけ、この科目をその後も勉強しているか、と尋ねた。私は馬鹿正直にも、いいえ、と答えた。すると彼はかなりきついことを言った。「なるほど、しかし外国へ行こうというのなら、当然私の国際私法を、云々」。だが、老イェーリングがこの状況を収めて言ってくれた。「まあまあ先生、国際私法は船の上でもちゃんと学べますよ」。こうして私は、無事に両法博士(Doktor beider Rechte)となることができた⁽¹⁾。

転向についての私の喜びは大きかった。私の前には全世界が、広い世界が開かれていた。ドイツを外国で代表するという栄えある委託、旅行の行き帰りに世界を知るための十分な手段、そして豊かな経験と広められた視野とをもって故国に戻り、こうして官吏生活をまったく新たに構築するという希望。私は官吏仲間から大いに羨ましがられた。

＊Jhering, v. ゲッティンゲン大学教授。

横浜に到着(原書第7章、91～94頁)

1885年10月13日、横浜にて⁽²⁾

老いぼれの「シティー・オブ・ペキン」号は、ついにくたびれた錨を横浜湾に投げ込んだ。サン・フランシスコからここまで22日かかった。4800海里あるので、快速船の「ノルトドイチャー・ロイド」号でも12日はかかったことだろう。だが、全体としては文句を言うことはできなかった。汽船の甲板の居心地は、ともかくも快適だったと言えるだろう。ところで僕は、旅行のあいだ何一つ不自由しなかったという凱旋歌を歌いながら、なおも最後の最後まで運命の悪口を広めてきた。ちょっと冷たすぎる船の風呂とか、その他いろんな愚行とかが、やっかいな頭痛や、ひどい咳き込みや、首筋の凝りや、その他の肉体的喜びの原因となった。だが僕は、抜け目なく、冷たい包帯を体に巻きつけ、同じものを首にも巻きつけ、第三の包帯を頭にも巻きつけながら、しまいにはすごい格好でベッドに潜り込んだ。3層のウール張りのデッキの下で、僕は汗をかいた。僕の船室は鍾乳洞も同然だった。だが済んでしまったことだ。翌朝、

生まれたばかりのように僕は這い出していったのだが、船上の最後の夜にいつものボウルで祝った⁽³⁾たいていの人よりは、元気でいた。

昨日、10月12日、午前10時前に、待ち焦がれた陸地が見えてきた。3年間の第二の故郷だ。始めは青い霧のようにして、海の青の中でほとんど消え入るようにしながら、それでも少しずつ少しずつはっきりした形が現れてきた。11時までには、陽の光を浴びて雲の層の上に富士山の明るい頂がはっきりと見えるようになった。——この山が老いた聖なる巨人であり、それが目の前にあることを教えてもらう必要はなかった。——その三角の形は、ちょん切られた頂とともに特徴的なものであり、すでにあらかじめ1ダースもの絵画でおなじみのものだった。

横浜湾が、今や両側から僕たちに迫ってきた。樹木の茂った高い岸壁には、小さい茶色の漁師村、そびえ立つ山寺、所々にはヨーロッパ風の家々も見えた。12時には灯船のところまで到達した。横浜港の境界だ。僕たちの老いぼれ蒸気船は、小白砲を撃つのに懸命だった。これに応じて付近の外国船が「おめでとう」と吠えた。その後まもなく、横浜を目前にして錨鎖が下ろされた。小舟に乗った人々のうち、ある者は半分だけ、ある者は四分の一だけしか衣服を着けておらず、ある者はまったく衣服を着けていなかったが、彼らは腹を空かせた蠅のように僕たちのところに押し寄せて、船の様々に突き出た部分に綱を結びつけては、よじ登って汽船の中に入ってきた。彼らは使役や小舟や飲物などあらゆる種類のことを、好意的だが理解できない口調で申し出た。でも僕たちには必要なかった。ヨーロッパ式ホテルのグランドホテル⁽⁴⁾とウィンザーハウスが、小型の上陸用蒸気船を差し向けてきたからだ。グランドホテルの代理人は、ヘーリンク博士*からの挨拶だとして、非常に心のこもった手紙を持ってきてくれた。彼はドイツ学校での僕の同僚である。その手紙⁽⁵⁾をここに添えておこう。

敬愛する博士へ！

日本へのご到着に対して、心より「ようこそ！」(Grüß Gott!)と申しあげま

す。当地での滞在が快適なものでありますように。これを機会に、勝手ではありますが、私たちが良い隣人になり、そうでありつづけたいという願いをもっております。というも貴方の住居は——このことがさしあたっての大きな関心事でしょうが——私の住居のすぐ隣りにあるからです。私たちは、牛込区の一つの丘を分け合うことになるのです。牛込区は東京の一区ですが、とても住みやすく衛生的なところです。この家は新しく建てられたものですが、お氣に入れば幸いです。お宅の調度品が完全に整うまでは、貴方はもちろん私のお客です。ですから、私たちはなんでもじっくりと話し合うことができます。行きたい気持ちは山々だったのですが、残念ながら私は汽船まで貴方を迎えに行くことができません。実は到着がいつになるか、ちっともはっきりしなかったからです。恐れ入りますが、到着しましたら……の宛先⁽⁶⁾まで「着いた」と電報を打ってください。そうしましたら、学校から二人の者がお迎えにまいります。彼らは、この名誉を私から奪おうとしたわけではないのですが。彼らは、貴方の荷物についてもお世話することになっています。一人は益森〔英亮〕氏といい、学校の事務長です。彼はドイツ語を話せません。もう一人は生田〔堯則〕氏といい、日本人の教員ですが、本当に上手にドイツ語を話します。

この手紙は、グランドホテルの代理人をつうじて貴方に手渡されることでしょう。私はこのホテルに泊まることをお勧めします。とにかく東洋一のホテルですし、そのうえ比較的安いのです。

○・ヘーリンク博士より

僕は善良な中国人に酒手をはずみ、以後の航行の無事を祈った。彼もすばらしい言葉で、お世話をしてよかったと請け合ってくれた。その後、上陸用蒸気船で岸壁に向かった。僕たちは快適で幅の広い石造りの階段を登って、平らな防波堤に上がった。不動の大地に辿り着いたわけだが、そこで無邪気な日本人たちに取り巻かれた。彼らは無言でぼかんとしながら、僕たち、とくに婦人たちをびっくりしたように見物していた。防波堤の板石の上でカラカラ音を立てる高い木靴⁽⁷⁾を履いて、まるでわざと騒ぎを起こしたいかのようにしながら、彼らは衣料倉庫、つまり税関検査場まで僕たちについてきた。日本政府からの

「許可証」のおかげで、支障なく通過できた。僕はさっそく人力車（二輪車、人間が引っ張る）に乗り、まずは逓信局に行って、無事に到着したとの報告をドイツと東京に発信することができた。達者な脚をもち半裸で褐色の肌をした苦力（Kuli）は、それから僕をホテルまで引っ張っていった。

そこではちょうど、とくに汽船の乗客のために昼食が用意されたところであった。僕たちは、すべてが新鮮な料理を楽しんだ。先週は、缶詰の悲惨な代用品のみで摂った料理であったけれど。グランドホテルはまったくフランス風であり、周囲が日本式である中では、そのヨーロッパ式の快適さによって人を驚かせる。

*Hering, Dr. 1885～1891年まで東京の独逸学協会学校教師。現在オーバーロストラ・バイ・アポルダの牧師。

東京での住居（原書94～97頁）

1885年10月19日、東京にて⁽⁸⁾

翌朝の10月13日火曜日、朝食を摂っていると、早速彼らがやってきた。益森氏と生田氏である。益森氏は、学校の対外的事務とくに財務の担当で、日本人幹部職員の次席である。謙虚に三度もお辞儀をしながら、彼らは名刺を差し出した。生田氏は上手にドイツ語を話して、僕にようやく故国で挨拶できることにつき、彼らがいかに幸福に思っているかを述べた。僕はこれに応えて、日本を知ることは、実に8歳のときからの僕の強い願いでありました、と言った。こうした言葉の贈り物が歓迎されることが、今の僕にはとても嬉しい。これは明らかに彼らを満足させた。実務家の益森氏は、11時に東京に向けて出発してもいいかと聞いてきた。

僕はまだ総領事のところに行かねばならないし、その他の用事もあります、と返答せざるをえなかった。これについて彼らは考えて、それなら夜の11時に出発してもいい、ということになった。このことは愛想良く聞こえたが、本当は彼らはこの点について些かも同意したわけではなかった。僕たちは妥協し

て、それでは1時30分に、ということにした。彼らは荷物の手配をしてくれた。大きな木箱も一緒だ。幸運にもここまで無事に到着したものだ。こうして、僕はまず総領事のツァッペのところに行った。

僕は青木閣下からと、海軍大将のツィルツォウからと、その他何人かからの彼にあてた紹介状を持っていたので、好意的に迎えられた。残念ながら、これらの敬愛すべき人々のもとに、昼食まで留まることはできなかった。それどころか、また立ち寄る約束をして、別れを告げねばならなかった。僕はここで、旅行仲間のクリーン*にも別れの挨拶を告げた。

こうして1時半に、僕たちは横浜駅を出発した。駅はまったくヨーロッパ式で、鉄道の状態は良好だし、運輸業務もみごとに統制されている。これにはわが国の場合と同様に四つの等級がある。三等車と四等車は日本人で一杯で、上流のヨーロッパ人はたいてい二等車で行く。そして身分相応と意識する場合のみ、一等の優雅で赤革張りの車室に乗り込むのである。鉄道は四分の三時間、江戸湾に沿って走る。右側には港、左側には樹木の茂った山が美しく見える。列車は5回目に停まって⁽⁹⁾、東京に着いた。東京は巨大都市で、その周囲は48イギリス・マイルにおよぶ。学校の用務員が僕たちを馬車で迎えて、手荷物を受け取った。僕が彼に手を差し伸べ、生田氏をつうじて、仲良くしましょうとの意を伝えてもらったとき、彼はなにか勝手に沈黙に埋没しがっていた。実務家の益森氏がその間に再び人力車を手配しおわっていたので、今度は猛烈な早足で東京の道の雑踏を駆け抜けた。横浜が半ばヨーロッパ的だとすれば、東京はまったく日本的な都市である。何時間もヨーロッパ人に出会わないこともしばしばだし、ヨーロッパ式の衣服はいつでも指をさされる対象となる。道路は清潔で広く、すべて良好に舗装されている。家屋は低く木造であり、日中は道路に向かって完全に開放されている。下町の家屋は店になっており、道路にまではみ出た品物や製品が、市中心部の全域に、ヨーロッパでの歳の市の風景のような雑然とした特質をもたらしめている。

半時間ほどの走行のあいだ、苦力は休むことなく、猛烈な速さで——少なくともベルリンでの上質な一等辻馬車と同じくらい速く——駆けしたが、こうして僕たちは牛込区に到着した。僕たちの住居が建っている丘は市中心部の外側に

あるが、市中心部をすっかり取り囲む幅広く美しいお壕に隣接している。この丘は、旧市街を一望し今やほとんど余すところなく建て込んでいる、無数の丘のうちの一つである。丘の上にはたいい比較の裕福な人々が住んでおり、したがって近辺は家がゆったりと建てられていて、低地の都市部よりは健康的で整然としている。

丘の下は急勾配なので、僕たちはその麓で下車しなければならず、僕は心臓を鳴らしながら菜園の砂利道を上っていった。この行き止まりに、ヘーリンクの家がちらちらするのが見えた。この山は優に60フィートの高さがあり、円い形をしている。上の平地と中腹までの傾斜地が、僕たちのものだ。境界には、桧葉で出来た美しい生け垣がある。それぞれの家までは、奇妙な曲がりくねった砂利道が伸びている。この砂利道が生け垣を途切らせているところには、開き扉の門があり標札と呼び鈴が付いている。ヘーリンクの家は、半ば日本式で半ばヨーロッパ式である。長いあいだヨーロッパで暮らしてヨーロッパ式の快適さに慣れたある日本人が、もとは自分自身のために建てたのだが、彼の日本人の家族はヨーロッパ式の家に住もうとしなかったのも、もっぱら家族のために日本式の部分を設けたのであった。三つの洋間はとても居心地がよく、またピアノがあることが僕にはとても嬉しかった⁽¹⁰⁾。

ヘーリンク家では、格別に心からの歓迎をしてくれた。彼らの善良でドイツ的で好意的な顔を見たときに、不確実な思いや不愉快な考えという重荷は僕の心からすっかり取り去られた。彼ら夫婦は二人ともまだ若いうえに結婚して間もなく、まさに幸せを実感しているところであった。僕たちはコーヒーを飲み、互いに「腹を探り合った」。

やがて学校の幹事である枢密顧問官の山脇〔玄〕法学博士が馬でやって来て、僕に挨拶をして家を引き渡してくれた。彼は魅力的な人物で、ドイツで「博士」となったのだが⁽¹¹⁾、僕にはまったく格別の同僚として挨拶してくれた。そもそも、青木が僕に持たしてくれた添え状は、非常に親切に書かれたものであったにちがいない。というのも、どの人々も僕に対して大変好意的であるからだ。ヘーリンク夫妻の庭には、噴水付きの小さな金魚池や、かわいい岩屋や、日本製の古びた庭石灯籠などが設けられたり、楓や杉竹や棕櫚が植えら

れていた。僕たちはこの庭を通して、僕の家に行った。それは、ヘーリンクの家からせいぜい20歩くらいしか——軒から軒まで——、離れていない。ヘーリンク夫妻が、この家を僕のために新しく建ててくれたのである。僕の占有物として鍵が手渡されたとき、僕は誇らしかった。それは簡素な平屋で木造だが、モルタルが塗られているのでどっしりしているように見えるし、薄茶色のペンキで上塗りされ、スレートで屋根が葺かれている。正面には、真ん中ではないが、入口があり、家を両側に分断する廊下に通じていて、その右側と左側には各々二つずつの部屋があり、それぞれ一つは表に、一つは裏に出られる⁽¹²⁾。

この家は今のところまだ家具を備え付けていないので、僕は必要なすべてのものをぜひとも買わなければならない。僕の家裏の入口からは、日本式の白木で造られた部分に廊下に通じており、そこには使用人部屋と、台所と、野暮な浴室と、その他の空間がある⁽¹³⁾。そのすべては、時とともに必ずや、とてもかわいらしく快適になることだろう。僕の唯一の悲しみは、皆さんの誰一人としてこの家を見ることできない、ということだけだ。

＊Krien. 1889年、ソウル（朝鮮）駐在ドイツ領事。のち総領事。

住居と家計（原書97～98頁）

1885年10月19日、東京にて⁽¹⁴⁾

第1日目は、ヘーリンク家の客として過ごした。これ以降、食事は彼らの世話になる、ということで僕たちは合意した。僕たちは昼食は彼らの家で皆で食べることにして、まず朝食は決まった時間に僕のところに持ってきてもらい、夕食は、気分や必要に応じて、別々に摂ったり一緒に摂ったりすることにした。それでさしあたって使用人は一人で済むことになり、ヘーリンク家の料理人の義弟でケイジロー（Keijiro）という名前の男を、毎月6円＝24マルクで雇った。この給金で、彼は食べたり着たりしなければならないのである。彼は小柄で善良な男だが、僕の求めに応じて何でもしたいと大いに尽くしてくれる。一定期間彼の誠実さを頼りにできたならば、僕は彼を長期にわたって手元

に置きたいと望んでいる。ヘーリンク家の料理人は妻子もちだ。この料理人は毎月8円=32マルクをもらって、自分ですべての食材を購入し、みごとにヨーロッパ風の料理を作るうえに、買い物の際に許される儲けが少ないにもかかわらず、非常に安くやりくりする。台所はいつも清潔で食欲をそそるようにみえる。食料品はドイツよりも安い。牛肉の値段はイギリス・ポンド（ドイツ・ポンドよりちょっと少ない）当たり14円=56ペニヒ、舌肉は20銭=80ペニヒ、上等のヒレ肉は32銭=128ペニヒである。野菜と果物はもっと安い。

これに対して、ここで作れない輸入食料品はすべてが相当に高く、ビールやワインはドイツよりもかなり高い。良質で本物のビール1瓶の値段は75から80ペニヒであり、ワインもビールほど高くはないにしても値上がりを被っている。我々は日常的な飲物としてカリフォルニア・ワインを飲むが、これは良質で安価であり、すばらしくおいしい。

日本での移動手段（原書98～99頁）

〔1885年10月19日、東京にて〕⁽¹⁵⁾

ヘーリンク家には、シゲ（Singe）という名の女中と、街に行ったり学校に通うための車夫（Kurumaläufer）がいます。こうした比較的大きな経費にもかかわらず、彼は給料の一部を貯蓄しています。彼の給料は私のと同じくらいなのに。もちろんこれが成り立つのは、もっぱら次のことによっているのです。彼の奥さんが家計を気にかけて、料理人による正確な請求書作成を求めているというわけです。

僕は来る日も来る日も馬を待っています。桂〔太郎〕將軍は長いあいだドイツに滞在して第三軍団総司令部に勤務していた人ですが、新馬制度の監察官ということもあり、彼を訪問した際に、なんとか馬を調達してもらえないかと頼んでみました。そのとき彼はまことに愛想よく、良い馬を新馬の値段で寄してくれると約束したのです。わが家の台所は、ヘーリンク家との協定によって、馬小屋に変えられました。台所は平土間ですし、石が敷いてあったので、馬小屋として使いやすかったのです。清潔さを保つために、戸は反対側に移さ

せました。

そもそも東京では、足以外のなんらかの移動手段が必要です。もちろん鉄道馬車はあるので、なるほど日本の道路ではそれでまったく十分にみえます。でも鉄道馬車は、第一に下町の大通りでしかあまりお目にかかりませんし、第二にドイツの同じ名前の移動手段の水準には及ばないので、我々と同じ社会階層には利用されないのです。だが苦力が引っ張るのも、僕には見苦しいかぎりです。この汗をかいた男たちが鼻先から二歩のところにいることは、まずもってまったく快適ではないし、気分的に次のことを乗り越えることができません。同じ人間によって何時間も登ったり下りたりしながら、道の埃や車の混雑を縫って引かれて行かねばならないことをです。経験的にみてこの職業で6年以上健康でいられる苦力はいない、ということを僕はいつも考えざるをえません。横浜で聞いたのですが、苦力から客引きにあったらこう応じるそうです。お前には頼まないよ、お前はどうも結核持ちにみえるからね、と。使用しても弁解できるのは、僕の考えでは、他の利用しうる移動手段がその街にはまったくない場合のみです。ヘーリンク夫妻によれば、かなりの距離でも皆がそれを利用するのだから、僕もまもなく慣れるだろうというのですが。

独逸協会学校（原書99～100頁）

80年代の始め、日本に「独逸協会」(Doitsu Kiokai) が設立された。協会は、ドイツで教育を受けたことがあるか、または日本でドイツ人と交流することによりドイツの学問に触れた日本人たちを結びつけた。会長には日本の親王である北白川宮「能久」が就いた。彼はベルリンで陸軍大学校にいたことがある。実務上の委員長は桂將軍であった⁽¹⁶⁾。彼は当時は陸軍省の政務次官で、のちに総理大臣になった。彼らドイツの友人たちは、次のような考えをもっていた。すなわち、完全にイギリスやアメリカの影響下にあり、ドイツ人の教授でさえも英語で講義しなければならなかった東京大学に対抗して、ドイツ式の高等教育機関が創られなければならない、と。彼らは法律学校に絞って、とりわけそこでは、いずれ日本での治外法権が廃棄された場合に、国際裁判所の構成員と

なるべき官吏を養成しようとした。

日本の外交政策を当時支配していた意向は、ヨーロッパ諸国およびアメリカとのあいだの通商条約の改定であった。そうした条約を、日本人は抑圧的な重荷と感じていたのであった。彼らにとって最も抑圧的で恥ずべきことは、日本に暮らす外国人が日本の判決や日本の裁判に服さないということであった。彼らの国際的な名誉心は法的制約の除去を要求した。この制約とは、彼らをヨーロッパ諸国に対して二流の地位に貶めて、決定ずみのことを強要するものであった。さしあたり実現可能な目標として当時彼らの頭に浮かんだのは、最終審において外国人についての判決の際に混成の法廷を実現することであり、このために彼らは裁判官としてふさわしい人材を養成しようとしたのである⁽¹⁷⁾。

ドイツ人居留者たち(原書100～103頁)

当時の日本には、ドイツという強い潮流が主流であった。若いドイツ帝国が開花したこと、軍隊がフランスに対して赫々たる勝利を納めたこと、工業と技術の驚異的な発展、世界中にみられるドイツの学問の圧倒的な進歩、最後に老皇帝と大宰相⁽¹⁸⁾の尊敬すべき姿とが、日本においてもドイツ風が考慮されねばならないとの世論の転換を呼び起こした。そのうえこれは次のことによって現れた。行政のあらゆる領域においてドイツの代理人たちが日本の公務に任用されたので、私が東京に赴任した当時は、居留地にはおよそ30ないし40名が集まってそれぞれ行政や軍隊や学問に関わっており、彼らは日本国民の国家生活や学問生活や経済生活において重要な役割を果たしていたのである。たとえば、事務官のルドルフ*¹とテヒョウ*²、裁判官のモッセ*³とルドーフ*⁴、参謀将校のメッケル*⁵とフォン・ヴィルデンブルフ*⁶とフォン・ブランケンブルク*⁷、農学教授のケルナー博士*⁸とフェスカ博士*⁹、経済学者のラートゲン博士*¹⁰、工芸家のヴァーグナー博士*¹¹、気象学者のクニッピング*¹²、営林監督官のグラスマン*¹³とマイヤー*¹⁴、それにハウスクネヒト博士*¹⁵やリース博士*¹⁶のような様々な教師、最後に医学者のベルツ博士*¹⁷やスクリバ博

士^{*18}、といった人々を挙げることができる。

当時はドイツの利益は、フォン・ホルレーベン公使^{*19}によって卓越した仕方
方で代弁されていた。あらゆる方面にわたって役所の任務を正当化すること
を、彼は抜群の仕方 で心得ていた。彼は外国とりわけ日本に対して、途方もな
く巧妙で実績のある政治家だった。この時代の偉大な政治家たち、つまり山県
〔有朋〕元帥、伊藤〔博文〕総理大臣（彼の崇拜者たちは「日本のビスマル
ク」と呼んだ）、大山〔巖〕陸軍大臣、すでに言及した桂大臣と青木大臣、野村
〔靖〕通信大臣などは、頻繁にドイツ公使館を訪れる客であったし、国同士の
関係はきわめて友好的かつ強固であった。強い不信感をもって展開を見守って
いたイギリス人たちによる、活発な対抗策にもかかわらずそうであった。日本
の自由港で商工業に従事するドイツ人の住民を包容力をもって援助したり、そ
の人間的な信頼を獲得することを、ホルレーベンはもちろん理解していた。彼
も結局は、ドイツ大使館の愛すべき客好きの家長であって、ドイツ人の居留者
をしばしば陽気で刺激的な集団にまとめあげたり、一人ひとりに対しては、
各々の利害を効果的に防衛したり精力的に代表する気分を注入したのである。

ドイツ本国では、商人や官吏や教授からなるドイツ人の居留者を団結させたり
代表したりすることは十分にたやすい、と思われている。ところが、東アジ
アの最も外側の端では、商人と学者と軍人とのあいだの根強い不信感がおのず
とみられる。その克服のためには、フォン・ホルレーベン公使のような指導的
な人物の賢明さと如才なさが決定的に大きく貢献しうる。だが大学出身者のも
とですら、また彼らと将校たちのあいだにも、祖国からこれだけ遠く離れてい
る場合にはありえないはずの、交流のための障害があった。連邦分立主義の風
潮や、信条告白的な区別や、身分上の相違は、東アジアにまでも到達した。そ
してこのことは、あたかも我々ドイツ人は、運命や危機の鉄槌による以外には
統一的な思考や行動に向かって団結することはありえない、かのように映る。
だが他面では、個々のドイツ人の偉大な自主性、その研究や意欲の独自性の強
調、正しいと思う見解への徹底した固執、議論することへの強い傾向は、日本
にあっては精神的刺激の無尽蔵の源泉となってきたのである。私はこの独自に
構成された居留地で過ごすことができた4年間のうちに、自分の思考や知識の

豊かさを手に入れたのだ、と思う。別の種類の修行によっては、同じようにそれを獲得することは出来なかったであろう。

ドイツ精神が遠い東アジアの地で民俗学的研究や比較方法論的学問の領域で果たしてきたことについて、なにかの見識を得ようとする者は、『ドイツ東亜文化協会研究論文集』(Veröffentlichungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens)⁽¹⁹⁾を手にするといふ。その第1巻は、1873年から1876年にかけてベルリンのアッシャー・ウント・カンパニーから刊行された。これはドイツ人の仕事の多様性や徹底性についての見識を示すものであり、これには実際問題として、他の文明諸国による成果も太刀打ちすることはできない。日本の最良の人物たちは、このことに当時すでに気づいていた。だからこそ、ドイツの利益のための転換が八十年代に生じたのである。そう、彼らは気づいている。彼らは今や次のことを知っている——これについては私のところに明白な証拠が揃っている——。すなわち、戦争と敗北にもかかわらず、ドイツの文化および学問についての虚言や侮辱にもかかわらず、もしも互いに結実しうる仕事が再び昔のように花開くべきだとするならば、日本とドイツとはなによりも学問の領域で手を差し伸べねばならない、ということ。

- * 1) Rudolph. 中級事務官。1885年に日本に滞在。
- * 2) Techow. 日本滞在の下級事務官。
- * 3) Mosse. 1885年当時は日本雇用の裁判官。のち高等裁判所事務官。
- * 4) Rudorff. 高等裁判所事務官。1885年当時、日本に滞在。
- * 5) Meckel. 日本雇用の参謀将校。のち陸軍大将。
- * 6) Wildenbruch, v. 陸軍大将。日本雇用の参謀将校。
- * 7) Blankenburg, v. 1886年当時は休職して日本雇用の参謀総長。のち陸軍大将。
- * 8) Kellner. 東京大学農学教授。のちライプツィヒ農科大学学長。
- * 9) Fesca. 東京大学農学教授。
- * 10) Rathgen. 日本の大学教授。のちハンブルク大学教授。
- * 11) Wagner, Gottfr. 東京大学教授。
- * 12) Knipping. 東京大学の気象学者。
- * 13) Grasmann. 東京駐在の営林監督官。

- *14) Meyer. 日本滞在の営林監督官。
- *15) Hausknecht. 東京大学教授。
- *16) Rieß. 日本の大学教授。現在ベルリン大学教授。
- *17) Bälz. 日本の大学教授。
- *18) Scriba. 日本の大学の医学教授。
- *19) Holleben, Theodor v. 1885年当時は東京駐在ドイツ公使。のちワシントン駐在大使。

1895年の誤った対日政策（原書103～104頁）

政治的に有望な時代を指摘することが重要ではあるが、それはドイツにとっての80年代であるけれども、我々のせいで最も深い不信の、つまり最もひどい敵意の時期に変わってしまった時代のことでもある。かりにホルレーベンが1895年になおも東京駐在の公使であったとしたら、おそらくは不幸な下関講和⁽²⁰⁾に行き着くことはなかっただろう。この講和に際して、ドイツはなんの確かな根拠もなしにフランスやロシアのお伴を務め、彼らと一緒にあって、日本人が中国に勝利した戦争を利用するのを妨害したのである。日本人は中国を東アジアの繁栄のために有効に開発しようとしたのであるが。こうした干渉⁽²¹⁾は、ある種の棘として日本人の心に刺さった。そして日本人の国民性に独特の仕方でもって、彼らは静かに目標を定め報復の機会を待ったのである。世界大戦が勃発したとき、彼らの時代もまたやって来たのだ。日本がドイツに対して戦端を開くという危機は、言葉の上では、ドイツが他の諸国とともに日本に向けた不幸な危機に符合したものだ。不当なことに、日本は教師であり友人であるドイツに反抗した恩知らずと非難された。この友人こそが日本に無礼を働き、イギリスの腕の中に追いやってしまったのだが。1914年にドイツに戦争を布告した人々は、八十年代以降ドイツの友人ではなくなったのである。最近では、我々のせいでイギリス派が優勢になってしまった。ドイツ派は、我々の素っ気なさにもかかわらず、日本の地でははるかに優勢であったのだが、彼らはイギリスの影響の圧倒に対してもはや何もしえなかったのである。

1912年における桂太郎の訪独計画（原書104～105頁）

戦争の少し前にドイツ派は、国家という船に別の航路を示すべく、再度の試みをおこなった。それは1912年の秋のことであった。当時の総理大臣であった桂侯爵については、前に「独逸協会」の委員長として言及したが、彼はヨーロッパ旅行の際に、ドイツに来て旧い交友関係を復活させようとしたことがある。彼の訪問は大がかりに準備された。ベルリン駐在日本公使の提案で、ベルリンで引退生活をしていた元公使のフォン・ホルレーベンと私とが、日本公使館において日本の代理人たちと会合した。ベルリンに日独協会（Japanisch-deutsche Gesellschaft）⁽²²⁾を再建することにつき相談するためであった。新たな会則が起草され、役員が新たに構成された。日本公使が名誉会長、ホルレーベンが会長、そして私は会長代行になるはずであった。両国民からなる多数の会員が加入する用意もできていた。その目的は、不当にも互いに遠ざけられてしまった両国の友好的関係を復旧させることに、ともに尽力するためであった。桂侯爵の到着は、協会の再建が確実なものになることによって祝福されるはずであった。だが、桂はペテルスブルクまでしか来なかった。彼がそこまで来たそのとき、日本の先代皇帝である天皇が死んだのだ。桂は召還され、それからまもなくして彼自身が亡くなってしまった。彼は我々にとって、最も信頼でき最も影響力のある友人の一人であった。両国の友好的な関係を回復させるという希望は、彼とともに墓に葬られてしまった。そして戦争は不可避となった。

世界漫遊旅行者の日本観（原書105～106頁）

我々の外交的挫折全体の根本的な原因と考えているのだが、以上のような東アジア政策の根拠は、無知、つまり日本国民についての誤った評価にあった。日本人ほど分かりにくく奥を究めにくい国民は、地上に存在しないことだろう。日本に最も長く在住したドイツ人の一人であるヴァーグナー教授は、余人

の追隨を許さないほどに、この国民についての深い理解に入り込んだ人物である。貴方は我々のうちの誰よりもよく知っているはずなのに、どうして日本について何も書かないのですか、という私の問いかけに対して、彼は次のように答えた。私はすでに何度も羽ペンを執ったのですが、いつもいつもそれを片づけてしまったのです。というのも、深く入り込めば入り込むほどに、私はファウストのようにますます悩むことになったからです、と。「さて、とっくりとわかったのが、人間、何も知ることはできぬということだとは」⁽²³⁾。

浅薄な人々ほど、つまりは感激して汚い道具について語ったり書いたりする世界一周旅行者や世界漫遊旅行者ほど、茶室や花祭り、人力車、硫黄泉である草津や芦ノ湯にみられる両系統の気のおけない温泉、富士山や日光の諸寺や劇場での怪談劇、太った相撲取や優美な舞妓について、いつも真っ先に発言する。しかしながら、国民の魂、歴史、真理や神への取り組み、倫理、経済、家族生活について、彼らは何も知らない。それなのに、ミカド (Mikado, 帝) と切れ長の目の臣下たちについての日本式笑劇もしくはオペレッタ⁽²⁴⁾を観ては、ヨーロッパ人は笑いさざめくのである。ドイツをも含む広範な地域において、日本人は真面目に相手にされず、楽園のように美しい国の幸福な子供とされてきた。その幸福を壊すのは、せいぜいのところ、ときどきの地震と台風のみである。この国では、みごとな漆器や陶磁器、象牙の彫り物や新奇な絵画を買うことができる、というのだ。

魅力的な国民と美しい国土にすっかり感激するあまりに、真の本質を探ろうとする批判者は排除されてしまう。これに属するのは、第一に、商売上の交流に際して信頼と律儀を失った商人たちである。日本流の礼儀を偽善と、無口な抑制を抜け目のなさ、目的意識を仮借のない利益政治とみなした政治家たちも、ここに挙げられる。これに抗せるのは同様の武器だけである。固有利益の立場の仮借のない強調と、相反する意志を粉碎するのに適した手段への屈服の強要、とである。こうして世論は「陰険で生意気なジャップ (Jap)」とか「ちびの見栄坊」とかの挿絵の付いた風刺雑誌によって扇動される。だが他方では、このような挿絵は恐るべき「黄禍」(gelbe Gefahr)⁽²⁵⁾をも意味しているのだが。

日本人と一緒にその歴史や哲学や宗教、法や倫理、国家生活および家族生活に関わりあうごとに、すなわち観察が深まるごとに、私たちは彼らを理解することを学ぶのである。たとえ我々ドイツ人の感覚にとって多くのものが、誤解はされないまでも、誤解気味に——多くが説明されて、外面的に触れるのみで同感されないままであるとしても、私たちはけっして人種の相違を曖昧にすることはないし曖昧にするつもりもない。理解が進むことによって、是認の増大が、すなわち、天分豊かで力量があり、愛国的に思考し行動する国民への讃美が継承されることだろう。そして私たちは次のような可能性のために、開かれた眼を手に入れることだろう。日本が本当にキリスト教文化に心を開くのであれば、日本との平和的な競争において、今はまだ救いようがなく混乱しているように見える民族問題を、世界の平安へと解消することができるのである。

日本のヨーロッパ化(原書107～110頁)

新時代の日本の歴史がまだ2世代の期間にもおよばないということを、念頭に置かねばならない。前世紀の50年代の前半に、日本と世界との最初の結びつきがようやく始まったのである。1854年にアメリカ艦隊の司令長官ペリーが本州の東海岸に登場して、日本側の反対を無視して上陸した。日本はそのときまで、外国に対してびたりと国を閉ざしていたのであった。彼は日本人に新時代の技術を用いた生産物をもたらし、それらの機能を説明して、通商条約の締結を申し出た。1年以内に回答を受け取りに来る、とのことであった。この提案は日本側において途方もない騒動を引き起こし、まったく相容れない意見が大勢となった。それでも最終的な結論として、通商条約を締結することになった。その後はいくつかの国々、つまりヨーロッパ諸国との通商条約があとを追った。新しい生活が、力づくで日本国民に押し寄せた。この国民はわずか数十年の期間で、プロイセン国民が大選帝侯、大王⁽²⁶⁾、先代皇帝ヴィルヘルムの時代にそれぞれ経験した、政治的発展の各段階を走り抜けてしまった。自明なことではあるが、この発展は急激なもので、せいぜい同時代人の一部分を捉え

ただけであり、さらにわずかな者のみが本当に理解しつつ新しい時代への移行を体験し、これに参画したのである。かなり多くの人々は外面的にのみ変化に協力し、盲目的な模倣本能が広範な層を支配した。自明な結果として、近代的でありたい多くの人々の外面的な振る舞いという、国民の尊厳にとっては危険なお笑い種が生じた。

ちょうど私が日本に着いたころ、日本の官吏には、官庁においてヨーロッパ式の服装を着用することが義務づけられた⁽²⁷⁾。また上流階級、とりわけ官界の婦人も、ヨーロッパ式に着飾りはじめていた。宮廷さえもが、ヨーロッパの手本になって、その儀式を改変せねばならなかったようだ。プロイセン宮廷の官吏であった式部官フォン・モール*は、何年か日本での職務を引き受けたのだが、それは夫人とともに、この改革に際して宮廷に助言をおこなうためであった。

外面的風習のこうした強引なヨーロッパ化を、私たちは当時は非常に残念に思った。日本人、とくに日本の婦人は、その民族的独自性においても衣服においても、ヨーロッパ式の装束をまとった新参者よりは、私たちにははるかに共感できたからだ。民族衣装を着たある日本女性は、繊細でしなやかな素材できわめて優しい色合に染められ、身体や手足に合わせて優美に流れるような装束といい、派手ではあるがけって過剰ではない幅広の帯といい、優美で繊細な形の腕と手に自由な活動の余地を残す、広く開放的な袖といい、これらは芸術的な目をも楽しませる眺めであった。彼女はこの衣装のほうが安心なことを自覚しており、巧みに振る舞っていたが、一つひとつの動きが調和していた。こうしたことは、彼女がヨーロッパ式の衣服を無理に着込んでいたときと、まるで異なるのである。窮屈な袖は当時の流行ではあったが、その中の腕は活動の自由と優雅さを失っていたし、長くうねった衣服に隠れて現れることのない内股の脚は、窮屈なヨーロッパ式の編み上げ靴の中で不格好な有様になっていた。日本人の女性たちは、こうした新しい扮装がいかに着心地悪く感じるかを、日本滞在のドイツ人女性たちに苦々しく訴えていたものだ。きわめて愉快的な思い違いも生じた。あるとき宮内官も夫人同伴で参加した会合で、紳士には洋服着用が命じられたことを覚えている。黒の上着とシルクハット着用とのこ

とであった。だが官房の間違いによってこの服装規定は婦人に適用されるものとされてしまい、途方もなくびっくりさせられたことには、宮廷の婦人たちと彼女たちを真似ようとした婦人たちが、会合の最前列に黒の衣服とシルクハット（Zylinder）姿で椅子に座っていたのである。必要な数のシルクハットを手に入れるためには、少なからぬ手間がかかったことであろうに。

男性の場合、ヨーロッパ化はさほど際どくなかった。それは軍隊から始まったからだ。日本人は、その低い身長に合った、我々の軽騎兵の制服を思わせる袴えを選択した。これはたしかに、昔のサムライ（Samurai）の武家装束ほどにはよく似合わなかったけれども、それを着て半日過ごすことになった。だがここでも、性急な革新はしばしば非常に滑稽に機能したのであり、私には次のような記憶に残る事件がある。ある宮中舞踏会に、洗練された近代的な日本人が、燕尾服の下にはっきりと見える青い一對のズボン吊りを付けて現れたのだが、彼はそれをベストの上で結んでいたのである。

私がこうした些細な思い出を述べるのは、日本人がそのことについて次のような釈明を申し出ているからだ。すなわち、日本人がヨーロッパ人に出会ったばかりのときに示したのと同様に、日本人に対するある種の嘲弄癖が横行しているのであろう、と。外来の、とりわけフランスの風刺雑誌は、そして遺憾ながらドイツの風刺雑誌もだが、そのようなくだらない挿絵にこだわり、これらを外国に広めることによって、容認できない一般化のかたちで嘲笑的な批判に慣れさせてしまった。

過度の模倣は一時的なものにすぎず、長期的にはふたたび品位ある判断に取って代わられた。すでに私が東京で生活していた当時、広範な層において、こうしたヨーロッパ化に対する激しい逆流が横行していた。あるとき総理大臣の伊藤侯は、彼の官邸で仮装舞踏会を主催した⁽²⁸⁾。銘々が仮装の衣装で現れねばならなかった。当然ながら、ここでもまことに奇妙な風体が出現した。だがその夜の成果といえば、土族の代表的人物からなる一群がヨーロッパ風の仮装ではなく、みごとに美しい歴史上の武家装束で現れたことであった。まず我々の目を惹いたのは、多くの人々に比して、この衣装を着用した者たちのまさに圧倒的な品位であった。陸軍大臣の大山伯爵は、頭が巨大であるうえに、痘痕

が引きつっているせいで普段はかなり醜くみえる顔の人物だが、先祖の武士の衣装をまとった姿は、我々の目にはまるで別人になっていた。身のこなしは、彼の「氏族」(Clan)の歴史に対する崇高な誇りで一挙に満たされたらしく、その痘痕顔さえもがある種の美しさをたたえていた。あたかも痘痕が、その偉大な過去を物語るルーネ文字⁽²⁹⁾であるかのように。

＊Mohl, v. 一等秘密顧問官。1888年当時は式部官として日本勤務。

注

- (1) ミヒャエリスの学位取得につき、堅田「ゲッティンゲンのイエーリング——二つの博士号をめぐる——」『獨協法学』64号(本号)、2004年。
- (2) 「横浜、グランドホテル」と記された日記。Becker, S.85ff.
- (3) 船酔いをしてボウルのお世話になったということ。
- (4) 「グランドホテル」(Grand Hotel)は、1873(明治6)年に、横浜谷戸橋(横浜居留地39番地)のヘボン邸前(20番地)に隣接して開業した全30室の洋風ホテルであった。望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』新潮選書、1987年、220頁以下。ウィンザーハウスも隣接地にあったが、のちにグランドホテルに買収された。富田昭次『ホテルと日本近代』青弓社、2003年、18頁以下参照。
- (5) 「東京、1885年10月7日」と日付が入った書簡。Becker, S.87.
- (6) 省略した個所には、もとは「独逸協会、東京、西小川町」と書かれていた。Becker, ebd.
- (7) 下駄のこと。
- (8) Becker, S.88ff.によれば、これも「1885年10月13日付」の日記のつづきである。
- (9) 横浜駅を出発してから、神奈川、鶴見、川崎、品川に停まって、新橋駅に着いた。中井、117頁。
- (10) ヘーリンクの家は、牛込区左内坂町21番地にあった。『目でみる獨協百年——1883—1983——』獨協学園、1983年、106頁参照。
- (11) 山脇玄は平田東助とともに、1875年にハイデルベルク大学のブルンチュリから法学博士の学位を得ている。ミヒャエリスはみずからの学位取得の経緯を思い出したことだろう。
- (12) ミヒャエリスが住んだ「牛込左内坂の家」の写真につき、中井、117頁。Becker, S.91.

- (13) 「牛込区左内坂の家の見取図」につき、中井、118頁。Becker, S.92.現在の新宿区市ヶ谷左内町。
- (14) 「1885年10月13日付」の日記のつづき。Becker, S.91f.
- (15) 「1885年10月19日付」の書簡。Becke, S.94f.
- (16) 桂太郎は独逸学協会学校の第二代校長であったが、独逸学協会の委員長であったことはなく、設立当初は庶務委員を務めた。ちなみに、初代委員長は品川弥二郎。
- (17) 井上馨は、外国人が訴追された裁判において、日本人裁判官と外国人裁判官の共同審理を提案し、これと引き替えに条約改正を実現しようとした。
- (18) ヴィルヘルム一世とビスマルクのこと。
- (19) 「ドイツ東亜文化協会」(Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, OAG)の研究論文集。OAGは1873年設立。ミヒャエリスは1886年に幹事会の第二書記に選出され、会報(MOAG)の編集にも携わった。Becker, S.40.ペッカー、38頁以下。
- (20) 下関条約。日清戦争の講和条約として、1895(明治28)年4月に調印された。
- (21) 三国干渉のこと。下関条約の調印直後、ロシア、フランス、ドイツの三国が遼東半島の清国への返還を要求した。イギリスはこの干渉に参加しなかった。ペッカーは、三国干渉の誤りを「在東京ドイツ公使フォン・グートシュミット男爵の下手際な振る舞い」の故としている。Becker, S.55.ペッカー、53頁以下。
- (22) 「和独会」(Wa-Doku-Kai)のこと。同会は、1888年12月に創設され、再建の努力にもかかわらず1912年に消滅した。Becker, S.55.ペッカー、54頁。
- (23) ゲーテ『ファウスト 第一部』高橋義孝訳、新潮文庫、1967年、31頁。
- (24) ウィリアム・シュウェンク・ギルバート『喜歌劇 ミカド——十九世紀英国人がみた日本——』小谷野敦訳、中央公論新社、1992年、158頁以下参照。
- (25) まさに「黄禍」というタイトルの風刺漫画がある。清水勲編『続ビゴー日本素描集』岩波文庫、1992年、158頁以下参照。
- (26) フリードリッヒ大王のこと。
- (27) 1887(明治20)年7月に服務規律が改正された。
- (28) 仮装舞踏会は、1887(明治20)年4月20日の午後9時から翌朝4時までつづいた。四百余名の参加者があったという。日本人の仮装についての同様の感想は、アルベルト・モッセ夫人のリナも記している。この点につき、堅田『独逸学協会と明治法制』木鐸社、1999年、107頁以下。4月22日付の『時事新報』3頁では、「大山陸軍大臣はチョン髷にて大小を腰に横へたり」と記すのみなので、彼が誰に扮したのかはわからない。『世外井上侯伝』第3巻、原書房、1968年、789頁以下参照。ミヒャエリ

ス自身は、横浜で購入したドイツの学生服を着て出席したという。この点につき、中井、130頁参照。

(29) 古代ゲルマン文字のこと。

(以下次号)